

納本

奈良の百萬

特260

753

7

0

3

1



始



特 260
753



お赤良百萬 無季 シテ百萬
なりて肛門に復も字なり ワキ身
に 此は位ヲ指ス
ハの産より出でたる物に 此は位ヲ指ス 此れ奥物



ハの産より出でたる物に 此は位ヲ指ス 此れ奥物
備中を見出し程に、此度思ひ立ち西
國行脚と奇 道行上 旅立つやおなら
一 おなら 一 おなら 一 おなら 一 おなら 一 おなら

Printed on the left edge of the page.

餘りくさしたはなむけも交け松枝田
の部無所死秘島をあらたに見て生
野拍屋時下部や芋の石所の川蔵や
焼いたお芋とゆり芋何れが子
津かど地ひふかと思ふ武物堅の草
木を分けておと出づ月輪ゆりて
山城の雀部は盛三部三部接部物部

ひりすきや、大佛が尻を赤良に里
若子の山に着きたる馬床くら
き場水につまふけりう急ぎの程に
佛都赤良の都に着きたる。出づ
若子の山に上り、大佛のありを
眺めの安ふ。名を言に昇つて風聲
きくも異具、四かたに書かず。是は雀事

Calixto

息付ね愛に。仁王門の方より女性
一人来りて。見せば黄衣なる衣に
青き冠をつけ。歩く姿は殿の放り
擲なり。いづるお赤良漬によび
たりと見えし。相打ちて事の由
をも尋ねば。と存し

^{シテ}上^ノ古の赤良の都の擲^ハ殿^ハ今^ハ此^ニ

色に匂ひぬ。りしは太佛の
ほりりに住み。念佛も申し。殿したる
お赤良を百萬と申す女に。わかれ
案の手より佛法に志し。早れ案の念
まをひりす。つかぎも。つ明かに
つ出程は。草の庵に。冬より
殿を放つて可笑しくもなり。一人者

下秋中

卓春日にもなりぬれば若草山に
 打ちのぼり、^中尻を放しやと息を吐つて
 臭い尻を立ち出づる長き尻の音
 ふ眠りの皆目覚めの音に眠りの皆
 目覚めなみの尻が音はかきかき
 うたてわおーばーこそ冬こもりし
 放らすも冷は春へなるもわが尻の

鼻になす入らぬわが尻の鼻になす
 入らぬ^{早朝}の^{早朝}がーそれなる女性に尋
 ねる事のみ ^{シカレ上}不思議かなわれ
 臭い尻を立ち出づる沈むと林を尻
 もも放りしに、あれなる生ぐさ俵の
 呼び捨てか、如何なる事にてある他
 らむ^朝この事にていか何事にて

Shikare

いぞ、可なりはは、交初め、一頁の、
 他、その、が、こ、は、は、と、若、子、の、心、と、い、ふ、は、
 け、れ、涕、物、語、の、心、へ、安、き、間、の、事、
 致、つ、る、事、
 萬、葉、集、に、青、丹、す、
 赤、良、の、都、に、咲、く、花、の、匂、ふ、が、如、く、尿、の、
 臭、な、り、と、あ、り、ま、さ、あ、る、如、に、赤、良、
 の、大、佛、に、草、食、ひ、す、ま、ぎ、り、て、世、間、刺、刺、の、

よ、ふ、な、尿、を、た、れ、た、と、赤、良、の、大、佛、は、
 五、丈、尿、の、大、き、さ、尿、の、に、ほ、ひ、た、ま、い、稀、
 な、る、名、尿、に、り、七、古、條、子、う、そ、八、百、里、
 ひ、き、渡、り、て、崩、え、づ、る、草、も、咲、く、葉、も、
 皆、萎、る、も、に、変、り、た、り、と、な、り、さ、り、と、
 馬、鹿、臭、山、と、は、名、づ、け、た、り、
 百、日、の、説、法、尿、一、つ、と、ハ、
 式、の、ハ、大、佛、の、

屎の功德にて、凡俗百日の呪法にも
 まさるゝふ事 屎一つは菓干脂に
 向ふより 戒めの屎の音に驚きしきり
 足立ち、唾者物と言ひ、鼻つつまりも、
 治りしたとへ 罪りば涕身も放り捨へ
 感ひしたお、ふきに逢はねばよす
 がり、落る屎にさへ香りとてふし、あり

恥しわふの、^上握りおきし、^上牛蒡が
 のすか、つ、^上尻あわてすて、^上興きし
 の、^上妹が尻は、^上靴か、^上作は、^上祿ら、^上ぬに
 ほんに、^上ま、^上出た、^上今、^上の、^上音、^上か、^上あ、^上か、^上の、^上仏、^上屋、^上の
 恥に、^上尻、^上なり、^上も、^上仇、^上な、^上ら、^上し、^上の、^上思、^上お、^上な
 佛といふ字は、^上ほ、^上ら、^上け、^上な、^上り、^上南、^上世
 阿弥陀佛、^上南、^上世、^上阿、^上弥、^上陀、^上佛、^上上、^上恥、^上を、^上恥

法苑珠林

五

二二二地あり 地 膾がすいそ氣が晴らて
 二二二の埃がどろりさぶりさす 耳とん
 二二二屍の糞尿の子がにて 至微至妙
 二二二なるとかや形なうて 都あり 屍
 二二二より出でて鼻に入り 地 骨がとて
 二二二時の快をとるに 足る 地 骨 人の放
 二二二屍の猶龍の火焰を吐く 如く 彼は 獲

二二二は 鼻を吐き 口
 二二二より出 鼻の穴より出る 鼻の穴
 二二二上下の差あるの 然らば 則ち 放屁
 二二二の 為ば ざるべからざる 人の 糞を 糞
 二二二するに 糞を 鼻の穴より 出物 腫
 二二二は 七の 所 腸は 骨と あり 是に 由り
 二二二を 糞は 骨と あり 是の 骨に 於て

殺つとも國を嫁げん、之を主人の鼻の
先に放つとも示苦からん、法衛の門、廊
堂の上、示す所の、何ぞをさるもの
つゝ辱きやあ、放つ辱きつゝ辱物
放つ多知ぢや、踏む辱に押當て、以
て是を思はんか、是より心に、屁殺し
の罪火なり、物に放屁未遂にて、こ

ルをすりせは息ちた、嗅着の嘲笑を
買ひて、屁はつぼめて、悔うも及ばず
シテ上、打つる佛と一皮、天下晴れを放るよ
ルハ、腹の心地も吉野山、花の香りも
あだあらむ、草に屁臭あり、虫に屁放
り虫あり、いたち格ハ屁を、敵を防ぐ
の楯とす、か、況や人間の身として、屁

10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20.

にかづけけ下女は夜言に屍が交り
身貴の屍をバ沸丸斯と云ひ、
馬康ふ奴 氣のなきそうな屍をた
ゆる 婿のたれしお赤良まは 嫁女
素直に引女けり 可ソツクを
消す身が傑は 屍の廻りにおけとをし
春のお赤良まはひてハ 咽喉がなる

早死にかゝる鬼の行つ 柏末の屍
の匂かふ 夏のお赤良まを歌ひハ
為すこともなくや 那須野に住む
吾は茄子磨茄子を食ひて 屍を
こく 秋の沸赤良ハ川崎に妻わら
細工買ひ給へ 子供を
すか 屍のための 春のお赤良ま

春のお赤良ま

春のお赤良ま

放てば、^{シテ}煙燧^カから、馬^{ウマ}鹿^カ馬鹿^カといふ猫^{ネコ}が
出^デて、^地戀^{コイ}のお赤良^{アカラ}、^地おなたよと、^地ひん
尻^{シラ}をゆづり合^アふつ、^地裸^ヌで放^ナり
らぬ先^{サキ}より臭^{ニホ}き仲^{ナカ}、^地裸^ヌで放^ナり
しお赤良^{アカラ}には、^地尻^{シラ}の^地まを、^地目^メの前^{マエ}に
見^ミる風^{カゼ}呂^ロの中^{ナカ}、臭^{ニホ}くはあれど、吾^{ボク}
子^コなり、^地吾^{ボク}はさりなり、^地吾^{ボク}も亦^{モト}。

いざ尻^{シラ}を放^ナらう、^地逆^{サカ}縁^{ヅメ}ながら、
臭^{ニホ}き^地鈴^{スズ}へ、^地尻^{シラ}の^地かたち、^地さお、^地あれど
品^{シナ}よきハ、^地梅^{ウメ}の^地枯^カ木^キに、^地鶯^ウの、^地谷^ヤ渡^{ワタ}り
する^ス聲^{コエ}なりん、^地又^{マタ}雪^{ユキ}月^{ツキ}花^{ハナ}様^{サマ}子^コ尻^{シラ}。
中^{ナカ}小^コ銃^{ジュウ}大^{ダイ}砲^{ポウ}爆^{バク}烈^{リョウ}弾^{ダン}、^地愛^{アイ}宕^{ドウ}の^地山^{ヤマ}の^地まじ
はしを、^地一^{ヒト}つづ、^地石^{イシ}段^{ダン}尻^{シラ}、^地蛇^{ヘビ}の^地小^コ巻^{マキ}を
渡^{ワタ}りて、^地羽^ウ凡^ボに、^地うなる^{ウナ}まじ、^地みづ^ミ尻^{シラ}。

白鳥のつがひ

上

寛の水の波みなく、出づるハ想夫恋
の曲川瀬の波の音するハ、それ
誠の阿房樂、足曳の、山鳥の屁の
しだら尻、長々一屁をひとり嗅ぐ
にぞいぢりの勝五郎屁、殊にな
んぞをおお良てハ、いたちの一夜
啼きならん、おの屁をば放らうよ

言ふかと思はば山尻、木末を渡り
黒雲の空を覆ふよと見らつが、
百雷の落つが如き響いて、あ
り姿は消えて失せて、句ばかりそ
残りたる屁の句こそそのらりけに

245. 246

11

昭和九年九月二十日印刷
昭和九年九月二十四日發行

(非賣品)
百部ノ内

9. 9. 20

著者 七 愚 庵 主 人
東京市澁野川區西ヶ原一〇七九
發行者 鈴 木 奈 良 雄
東京市神田區三崎町二丁目一
印刷者 鈴 木 越 武
東京市澁野川區西ヶ原一〇七九
發行所 有 閑 洞

終

